

サービスの再利用、共有など 各方面で促進されるSOAの新しい活用方法

日本アイ・ビー・エム株式会社
GBS ソリューション&アセット
部長
エグゼクティブITアーキテクト

二上 哲也 Tetsuya Nikami

【プロフィール】

Java™ や WebSphere® をテクニカル・サポートとして立ち上げ後、IT アーキテクトとして大規模案件の基盤アーキテクチャー構築および標準化に従事している。現在はグローバル・ビジネス・サービス（GBS）において、グローバルおよび国内の IBM ソフトウェア資産（アセット）をベースとしたソリューション推進のリード役でもある。SOA やコンポーネント開発をベースに、それらを業種ごとに最適化したソリューションを構築し、アセット・ベースのサービスによる効率化と品質向上を目指す。

世界金融危機の発生など、激変するビジネス環境にどのように適応していくかということは、企業にとって大きな課題となっています。この厳しい経済環境を乗り越えるためには、ビジネスの変化に素早く対応し続けることが重要となり、SOA はそれを IT の側面からも支援する有効な手段になっています。本誌 51 号において、SOA の基本的な特長についてはすでにご紹介しましたが、それから約 2 年が経過し、SOA に対する考え方や活用方法はさらに進化し、当時では試みられていなかった SOA の導入・活用スタイルが登場してきています。本記事では、その最新の動向について具体例を交えながらご紹介します。

ビジネス的な側面から見いだされる SOAの新しい価値

SOA が登場した当初は、SOAP（Simple Object Access Protocol：データやサービスを呼び出すためのプロトコル）や BPEL（Business Process Execution Language：SOA 標準技術のワークフロー言語）など、技術的な側面から SOA について取り上げられることが多く、SOA のメリットとしても特に「柔軟性」が注目されていました。その後 SOA の実装が各方面で進められると、次第に SOA によってビジネス的に何を達成するのかということに関心が寄せられるようになりました。そして SOA 活用のさまざまな可能性が追求され、現在では以下の 3 点



が SOA の主なメリットとして認識されるようになっていきます。

- メリット 1：SOA によるビジネス・プロセスの柔軟な変更
- メリット 2：サービス・コンポーネントの再利用による生産性向上
- メリット 3：サービスの集約・共有

メリット 1 については、ビジネス・プロセス・マネジメント（BPM）などとして以前から取り上げられていたものですが、メリット 2 とメリット 3 は最近になって特に注目されている SOA の活用によるメリットです。以下、この新しい 2 つのメリットについて詳しく説明します。

メリット2:サービス・コンポーネントの 再利用による生産性向上

サービス・コンポーネントの再利用については、以前から SOA のメリットとして取り上げられていましたが、それはあくまでも同じシステム内での再利用でした。ここで取り上げる再利用は、一度作ったサービス・コンポーネントを別のシステムでも再利用するというものです。例えば、IBM があるお客様の元で作ったサービス・コンポーネントをソフトウェア資産（アセット）として蓄積し、ほかのお客様にそのアセットを提供するという再利用の方法です。アセット化の際に、複数の企業で共通利用できるように標準化し柔

軟性を確保して構築することにより、迅速な導入が可能になり、コストも低く抑えることができます。

今後多くの企業において、ますます SOA の導入が進むことが予想されています。サービスの共有とアセット化が進み、企業が自分たちに必要なすべてのアセットを開発・保持するのではなく、「アセットを持つ」「アセットを買う」「他社のアセットを利用する」などの新しい IT のモデルが広まるでしょう。このように企業の IT 部門はコンポーネント化されたビジネス・サービスを包括的に管理・活用することで、ビジネス変化に迅速かつ柔軟に対応していくことができるようになります。

IBMの再利用可能なアセット開発

組織の枠を超えたサービス・コンポーネントの再利用の具体例として、IBM の取り組みをご紹介します。世界中に展開する IBM のグローバル・ビジネス・サービスでは、これまで数々の SOA ソリューションの実績を積み重ねてきました。そして、その経験で培った業種別のノウハウを基に、SOA に対応した IBM インダストリー・ソリューションを開発するため、インドと中国に SOA ソリューション・センターを新設しました。

SOA ソリューション・センターでは、再利用可能なアセットを業種別に整備し、それぞれの業種で共通に活用できる仕組みを、アセットと IBM WebSphere Business Services Fabric などの組み合わせにより構築し、コンポジット・ビジネス・サービス（以下、CBS）として提供しま

す(図 1)。WebSphere Business Services Fabric は、ビジネス・プロセスを素早く変更して、アセットの再利用と共用を可能にする製品で、2006 年に買収した Webify Solutions 社のソフトウェアを WebSphere 製品ファミリーとして統合したものです。

CBS を活用することで、お客様は汎用的な業界共通のビジネス・プロセス構築にかかるコストを抑えることができ、差別化要因となるコア業務に投資を集中することが可能になります。

メリット3:サービスの集約・共有

同業種内で再利用可能なサービス・コンポーネントであれば、それぞれの企業や部門で独自に構築・維持するのではなく、企業や部門の壁を越えてシステムそのものを共有した方がコストを抑えられるという発想が 3 番目のメリットになります。

このメリットを突き詰めると、業種ごとやグループ企業ごとに設立したシステムの共同利用センターに機能を集約し、それぞれの企業がその機能を共有するという形になるでしょう。例えばそれほど差別化の必要がないノンコア業務機能の場合には、共同利用センターに集約し、共同利用センターのシステムをそのまま活用できない差分については自社のシステムに構築し、SOA によりそれらの機能を各社のビジネス・プロセスに応じて組み合わせます(図 2)。また、同様の生産管理システムを工場ごとに維持・管理しているような場合には、共通化できる部分に関

しては共同利用センターに共有サービスとして集約し、各工場は画面系など差分システムだけ保有し基本的には共有サービスを利用することで全体の維持・管理コストを最適化することが可能になります。

このようなサービスの集約・共有が促進されれば、システム構築や保守

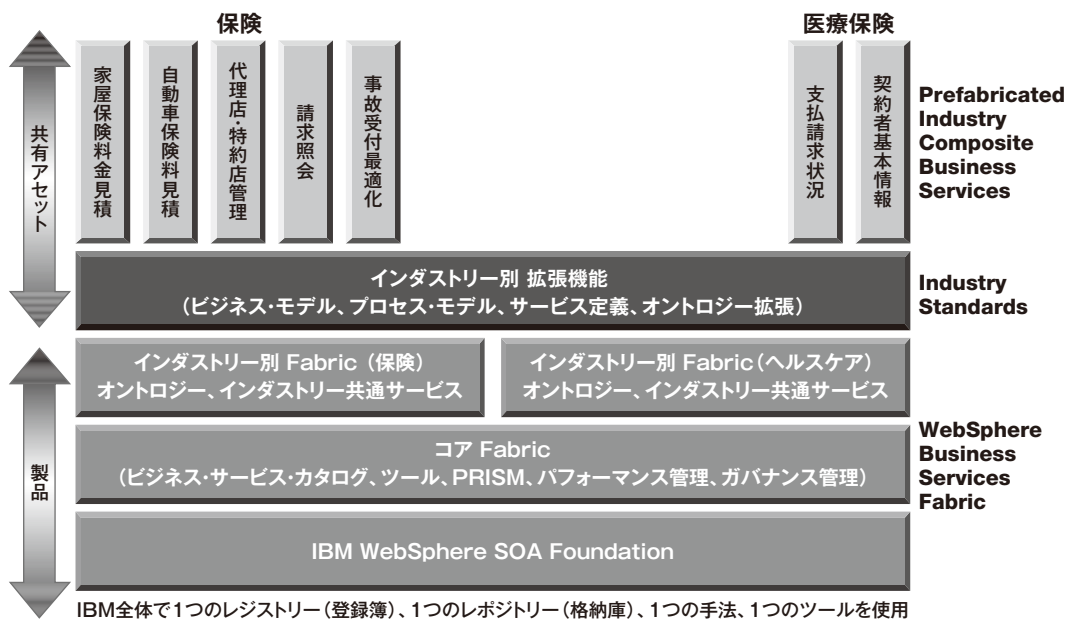


図1. コンポジット・ビジネス・サービス(保険業)

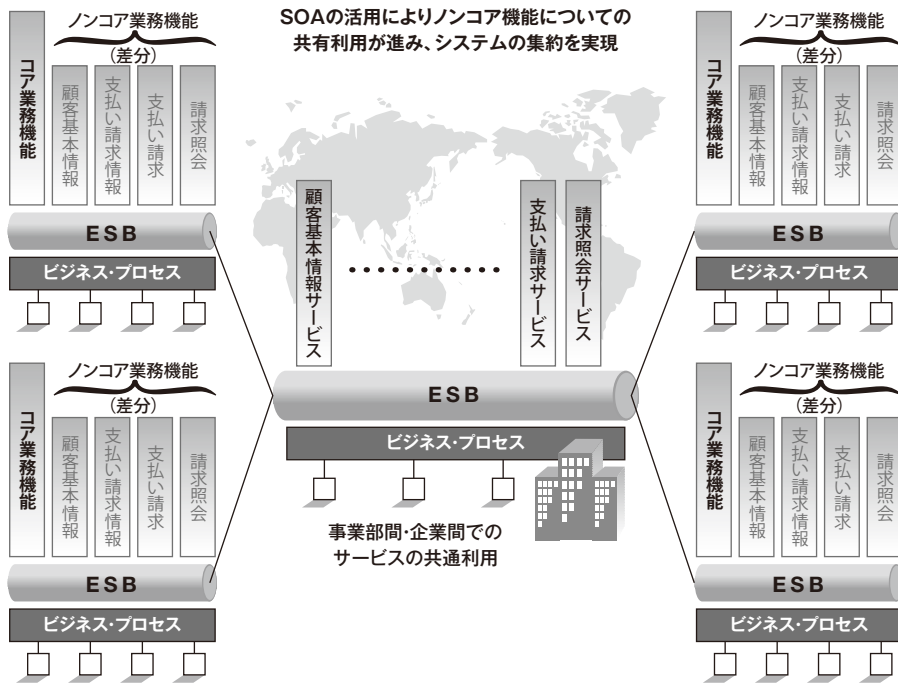


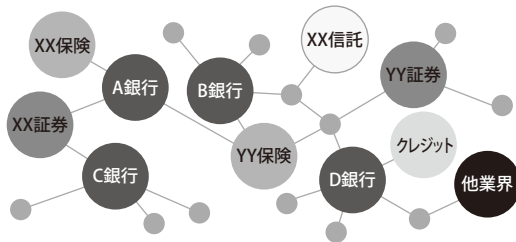
図2. SOAによるシステムの集約・共有

管理のコストを大幅に削減することができますし、実際業種によってはその取り組みが始まっています。

金融システムの標準化を図り、共同利用を促進

このような業種別でのサービスの共同利用の例として、「IBM 金融 SOA コミュニティー」をご紹介します。「IBM 金融 SOA コミュニティー」は、金融業界において、銀行、保険、証券などの業種の垣根を越えて、SOA の活用に関する研究、事例紹介、情報交換などを行うため、2008 年 5 月に設立されたコミュニティです。参加企業におけるお客様サービスの向上と情報システムの効果的な利用を促進することを目的に、約 30 社の金融機関が参加しています。

IBMのお客様におけるSOAを活用した商品サービスのためのコラボレーションの場



共通プロセス・モデルやツールの提供
SOA RERモデル(CBSテンプレート)、WebSphere Business Services Fabricなど
技術情報の提供
SOMAメソッド/技術、SOA RER for FSS、SOA基盤

図3. IBM金融SOAコミュニティ

SOA 活用の構想としては、それぞれの企業が持つ業務機能を相互に SOA のサービスとして活用するというものです。そして金融業界の企業同士のバリュー・チェーンを築き上げ、それぞれの強みを生かせるような「ビジネス ECO システム」を作り出します(図 3)。日本アイ・ビー・エム株式会社は、事務局としてコミュニティの運営に当たるほか、共通プロセス・モデルやツールおよび技術情報などの提供も行います。提供するツールには、SOA を活用した金融業界向けのソリューション群である SOA Rapid Enterprise Renovation for Financial Services Systems

(以下、SOA RER for FSS) が含まれます。

コスト削減の効果的な手法としてのSOA

以上のように、サービス・コンポーネントの再利用や共有など、新しい SOA の活用方法はすでに各方面で始まっています。上記にいくつかの具体例を示しましたが、それ以外にもさまざまな再利用、共有のスタイルはあります。既存システムを SOA のサービスの一つとしてラッピングし、有効に再利用する株式会社大和総研ビジネス・イノベーションの事例(本誌 24 ページ以下:インタビュー②参照)や SOA によるサプライチェーンのソリューションを SaaS (Software as a Service: 必要に応じてソフトウェアの機能をサービスとして提供する形態)として提供し、複数のお客様企業間で再利用する TradeMerit Corporation の事例(本誌 32 ページ以下:インタビュー③参照)なども、こうした新しい SOA 活用の流れの中にあるものです。

今後さらにこの流れは加速すると予想されます。SOA が登場した当初、「SOA の導入にはコストがかかる」というイメージを持たれることがありましたが、サービスの再利用、共有などが推進されている現在は、SOA はシステムの開発、メンテナンスにかかるコストを削減するためにも効果的な手法となっています。今後はこのようなメリットにも着目され、さらに多くの企業において、SOA の導入が促進されていくでしょう。